天理教教義翻訳の諸相 ①

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

明治期の教義翻訳

昭和３（1928）年、天理教の原典「おふでさき」が公刊された。その「まえがき」には、中山正善２代真柱によって次のような一文が記されている。

> 教祖様は日本人でありおふでさきは和歌の形で記（しる）された日本文であるから、これを直ちに世界に宣布しようとするには飜訳の必要を感ずるのである。換言すると、私は単に日本文としてのおふでさきの形を固守せず、自ら進んでこれを方々の言葉に訳して、少しも神意に反するものではないと信ずるのである。

海外伝道の生命力は教義翻訳に宿るといっても過言ではない。「おふでさき」のまえがきで翻訳の必要性が表明されると、その後、天理教の教義翻訳は組織的に展開されるようになり、変遷を伴いつつ現在に至っている。しかし「おふでさき」公刊以前の明治から大正にかけて、すでに教内外の人々によって教義翻訳が試みられていた。まずはその嚆矢をたずねるべく、明治期の主要な教義翻訳、特に原典翻訳に注目したい。

明治27（1894）年４月、ダニエル・クロスビー・グリーン(Daniel Crosby Greene) というアメリカ人がおぢばを訪れた。彼はキリスト教宣教師で、日本において聖書翻訳に携わった人物として知られ、全国的に布教を展開する天理教に関心を持ち、文献資料を集め研究していた。その来訪に関して同年５月28日号の『みちのとも』には次のように記録されている。

> 東京牛込市ヶ谷仲ノ町に居を占めらるゝデシ・グリーン氏は客月中旬本部に参拝し親しく部員に向かって教祖の御履歴教理などを聞かれその上豊田西の森なる教祖の御墓所に参拝してひたすら感動を起し帰京されたりと同氏は頗る宗教学に熱心の聞へ高き人の趣なるが帰京の後も書翰を寄せて教理を聞かれしこと再三なりしと

また『稿本中山眞之亮伝』には、「四月十日には、眞之亮は、東京で、天理教について著述しようという米人グリーンに会い、種々と本教の教義を説いた。」とあり、グリーンが好意的に迎え入れられた様子がうかがえる。明治28（1895）年、グリーンは『日本アジア協会紀要』（*Transactions of the Asiatic Society of Japan*）に「天理教―天の理の教え」（Tenrikyō; or the Teaching of the Heavenly Reason）という論文を発表した。おそらくこの論文は海外に対して天理教を紹介した初の外国語論文であり、天理教が初めてTenrikyoとして海外に紹介された。天理教の海外伝道は明治26年の里見治太郎父子による韓国伝道がはじまりとされ、教外者の手によるとはいえ、同時期に天理教が英文で紹介されたことは意義深い。グリーンの論文は欧米におけるその後の天理教研究に多大な影響を及ぼした。その内容は「天理教の起源」「宇宙説」「天理教の文献」「おふでさき」「みかぐらうた」「教義論」「礼拝」「布教方法」「組織」「結論」となっている。当時、羽根田文明や兼子道仙等による反天理教文献が出版され、社会には様々な偏見がひろまっていた状況で、それらの批判の根拠を問いつつ、グリーンは真摯な学究的態度と忠実な文献研究をもって天理教を論じている点は興味深い。さらに、「おふでさき」と「みかぐらうた」の翻訳を試みた点は注目に値する。彼はおふでさき第１、３、７号の一部の英訳を試みた。「みかぐらうた」は全て英訳している。いずれも解釈や訳語にかなり問題はあるが、それらは外国人がいかに明治期の天理教を理解したのかを知る貴重な手掛かりである。彼の英訳はおそらく天理教史上初の原典翻訳である。

その後、明治40（1907）年に、マルティン・オストヴァルト (Martin Ostwald) が「天理教―天の理性の教え」（Tenrikyo oder die Lehre von der himmlischen Vernunft）を普及福音新教伝道会の機関誌『伝道及宗教学雑誌』（*Zeitschrift für Missionskunde und Religionswissenschaft*）に発表した。さらに明治42（1909）年には、カトリック宣教師のレオン・バレー（Léon Balet）が『日本論集』（*Mélanges Japonais*）に「天理教―天の理の宗教」（Le Tenrikyo : religion de la raison celeste）を発表した。そして明治43（1910）年には、牧師として日本に赴任し、主に日本の浄土教を研究していたハンス・ハース（Hans Haas）が「天理教―現代日本における複合宗教の一新機構」（Tenrikyo: oder Ein neue synkretisches Religionsgebilde im Japan unserer Tage）をオストヴァルトと同じく『伝道及宗教学雑誌』に発表した。これらの論文でも「みかぐらうた」の翻訳が試みられた。中でもハースは韻文形式の数え唄としての特質を重視し、散文形式ではなく韻律的な翻訳を試みており特筆すべき点であるといえよう。

グリーンの論文発表から33年を経た昭和３（1928）年、後の弘文荘主である反町茂雄によって偶然発見されたグリーン論文が２代真柱の手に渡った。天理図書館長を務めた富永牧太によると、天理教に関する詳細かつ広汎な研究とともに、当時の反天理教文献に関して天理教に同情的な立場で論じたグリーン論文に２代真柱は驚き、それが蒐集活動に情熱を傾けるきっかけになったという（濱田，1994：40）。

天理図書館を広く紹介した名著『やまとのふみくら』の著者である濱田泰三は、富永の述懐に触れつつ、２代真柱とグリーン論文の関係を次のように論じている。

> 明治二十八年といえば、つまりは天理教にとって最も文献資料が乏しいとされる時代に他ならない。まさにその時代に、外国人の眼によって、それ以後も例を見ない程の理解力の深さで、客観的に捉えられた天理教の姿が書物というかたちとなってのこされていたということが、氏に古い文献資料の発見というものに強い関心を抱かせたのに違いない。（濱田，1994：41）

その後、昭和４（1929）年頃から２代真柱の命により、グリーンの英文は中西喜代造、バレーの仏文は森下辰夫、オストヴァルトとハースの独文は富永牧太が邦訳し、外国人による天理教研究に関して２代真柱を中心に積極的に議論が交わされるようになった。そして昭和５年、天理図書館が落成した頃から、それらの誤りを訂正すべく、教内から外国語で正しく教義を発信する機運が高まり、教義語の適正な翻訳研究を行う「訳語会」が結成された（大久保，1973：９）。「訳語会」における地道な努力は、昭和７（1932）年10月26日、天理図書館から刊行された英独仏『Tenrikyo』、いわゆる『外字新聞天理教』として結実した。英語は戸井憲三、ドイツ語は山口繁雄、フランス語は森下辰夫と、当時の天理図書館員らがその編集にあたった。『外字新聞天理教』は海外伝道の嚆矢となり、国内外の主要な図書館、大学、研究機関や公館などに送付され、昭和15年までその発刊が続いた。

このように教義翻訳の歴史をその黎明期から俯瞰すると、明治期における外国人の天理教研究と原典翻訳は、その内容以上に特別な意味を内包していたことがわかる。彼らの天理教研究という点を教史上の出来事と線で結ぶことで、２代真柱によって描かれた海外伝道の壮図が具現化していく道程が浮かび上がってくる。

［引用文献］

大久保昭教『外国人のみた天理教』天理教道友社、1973年。
濱田泰三『やまとのふみくら』中央公論社、1994年。